
紘くんが殺した人

阿田 怜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

絃くんが殺した人

【Nコード】

N8370Z

【作者名】

阿田 怜

【あらすじ】

私には絃くんという幼馴染がいました。そんな絃くんは罪を犯してしまったのです。絃くんにぴったりの罰はどれでしょうか。

プロローグ

私の幼馴染の紘くん。

小さい頃からずっと一緒でした。

けれど紘くんは罪を犯しました。

人を殺してしまったのです。

それは許されない事。

償いが難しい罪です。

罪を犯した人は罰を受けるべきだと、人は言います。

けれど紘くんにはそれは必要ありません。

もし必要なら紘くんにどんな罰を与えればいいでしょう。

終身刑？

死刑？

けれど、どんな事があっても紘くんの罪は消えません。

それでも私は思っています。

紘くんの罪は正しいとは言えないけど、

一つ選択肢だと。

聞いてください、紘くんのことを。

一章「死」

私と紘くんはいわゆる幼馴染の関係でした。

中学一年くらいまではずっと一緒にいました。家が隣ということもあって、登校の時はもちろん、いつも寄り道してから家に帰っていました。休日も紘くん以外の子と遊んだ記憶はありません。

鬼ごっこ、砂場遊び、おままごと……子どもがしそうな遊びといえば大体こんな感じです。随分と昔の記憶になるので、覚えている限りでは私と紘くんは、あまりそういうことをしていなかったように思います。

じゃあ、どんなことをして私と紘くんは遊んでいたか。

一般的に子どもは、外で元気よく遊ぶのが健全なイメージですよね。でも最近の子どもは、家の中に籠って遊ぶ子どもの方が多いみたいです。テレビゲームやインターネット、そういう物で遊ぶ方が子どもも楽しいんでしょうか。

私は今の子ども達を見ても、元気に外を走りまわってこそが子どもだとは思いません。だって私も紘くんも外で遊んだことはほとんど無かったんです。

幼少期の頃はよく絵を描いていました。チラシの裏側を使ったりして、クレヨンや鉛筆でぐちゃぐちゃと。小学校にあがって字を習ってからは、簡単な本など読んでいました。紘くんは、本を朗読するのが好きだったのでよく二人でやっていました。

会話は少なくても、とても楽しくて、紘くんと二人でいる時間はとても早く感じていました。他の子と遊んでも、ちつとも楽しくはなかったですね。外を走りまわるより、絵を描いたり、本を読んだりする方がよっぽど楽しかったです。元々運動は苦手だったこともあると思います。

紘くんは本当に不思議な男の子でした。

物静かで、口数が少なく、何を考えているのかずっと一緒にいた私にもよく分かりませんでした。だけど優しく、頭の回転も速く頭も良かったです。

小学校一年生の時だったでしょうか。私のパパが会社から水族館の招待券を四枚貰ってきたんです。パパ、ママ、私、弟の匠の四人分。だけど前日になって匠が高熱を出して水族館に行けなくなってしまったんです。匠はとでも残念そうでした。匠の看病をするため、ママも水族館には行きませんでした。余った二枚のチケットは、捨てるのも勿体なかったので、紘くん和妹の真梨ちゃんを誘いました。

紘くんも真梨ちゃんも、出発の時嬉しそうにしていたので誘った私も嬉しくなったのをよく覚えています。

私たちが向かった水族館は、当時CMやテレビでも取り上げられていた日本一大きい水族館でした。

日本一大きい水族館だけあって、他の水族館では見たことない、たくさん種類の魚たちが私の目を輝かせました。青と白色の魚、大きな口をした魚、電気をビリビリだす長い魚、名前なんか知らなくても見ていて飽きませんでした。思い出すだけで懐かしいです。今度暇があればもう一度あの水族館に行ってみたいものです。

紘くんはよく魚のことを知っていました。魚の名前の下に、小さな子でも分かる様にひらがなで書かれている説明よりも詳しく、飼

育員の人と同じようなくらい知っていました。

紘くんがとても目を輝かせたのは、イル力でした。

イル力を見るのは初めてらしく、それを目にした紘くんは確かこう言いました。

『イル力はとても頭が良いんだよ。超音波も出せるし、僕たちより凄いんだ。同じ哺乳類なのに不思議だよね』

その時は「哺乳類」なんて言葉は分かりませんでした。でも、イル力は頭が良くて凄い生き物なんだと知りました。

紘くんは、よく図書館からたくさん本を借りていました。色んな本を読んでいましたが、中でも生物の本を数多く読んでいたように思います。そういえば小学校高学年になってから紘くんの部屋は、本でいっぱいになってましたが、人体の本とか難しそうなものであるのを見たことがあります。紘くんはそうやって本から得た情報をきちんと覚える子だったんです。

紘くんは帰るまで、水槽の中のイル力から目を離すことはありませんでした。私は正直言うと、イル力よりも綺麗な小魚を見ている方が楽しかったです。

それからすぐに、今度は匠とママも一緒に海へ行きました。もちろん紘くんと真梨ちゃんも一緒でした。紘くんの両親も、と誘ったのですが紘くんに断われました。『仕事で、二人とも忙しい』と私のパパとママと、紘くんの両親はあまり仲は良くないようでした。ママは近所付き合いは大切だからと、近所のおばさんとは世間話をよくするのに、紘くんのママと話すのは、挨拶の時の僅かな時間だけでした。

紘くんの両親はとても厳しそうな顔つきでした。隙がないような、いつも身なりをきちんとして、やっぱり厳しい人達でした。

私が紘くんの家へ行っても、紘くんの両親はいつもいませんでした。紘くんはいつものことだって、たいして気にしてなさそうに言ったことがあつたけど、やっぱり寂しくないのは嘘だったように思います。

私のパパは、テレビで流れるアニメを制作する仕事をしていて、パパの作ったアニメを見るのは好きでした。だけど、アニメを観終った後にいつもパパは私がリクエストしたそのアニメのキャラクターを描いてくれることの方が、私はずっと嬉しくて好きだったんですよね。今でもそれが入ったパンパンのファイルは宝物です。

私のパパは、紘くんのパパの事をけなしていました。きっと以前から知り合いだったに違いありません。私も詳しいことは分からないんですよ、ママに聞いても上手いように答えてくれないんで、別にもう知るうとも思わないです。

紘くんの両親はいつも夜遅くに帰ってくることが多かったみたいです。本当に遅い時は、朝方に帰ってくるとも紘くんは言っていました。そういう時、ご飯はどうしているのかと尋ねると、コンビニ弁当などで適当に済ませちゃうそうなんです。

家族でご飯を食べているときに、うつかり私はその話をしてしま

いました。だけどパパは、紘くんの両親の帰りが遅い時はうちでご飯をこちそうしてあげるから、紘くんと真梨ちゃんを呼びなさいって言うてくれたんです。育ち盛りの時期にそういう食事は良くないからと、ママも同じ意見でした。

私は、二人がそんな事を言ってきたのがとても意外でした。だって紘くんの両親のことはあまり好きじゃないから、紘くんも真梨ちゃんもパパとママに嫌われてるところかで思っていたんです。でも、水族館に行った時、パパは紘くんと真梨ちゃんの笑顔を見てパパも微笑んでいました。ママだって、私が紘くんの話をしても楽しそうに聞いてくれていました。

二人が紘くんと真梨ちゃんを嫌っているなんて、とんでもないことだったんです。

『子どもに罪はない』

いつだったか、パパが言ったこの一言は凄く印象に残ってます。ただ、紘くんの両親は今でもこの事は知らないと思います。

その状態が一カ月くらい続いた頃でしょうか、ただでご飯を食べさせてもらっていることに紘くんは申し訳ないから、もうご飯は頂くことはできませんって私のママにそう言っていました。家族誰一人、迷惑だなんて思ったことは一度もありませんし、そんなことを思わせる様な行動もしてません。むしろ、紘くんと真梨ちゃんを歓迎していました。

だけど、紘くんはそういう子だったんですね。

そこでママは、紘くん料理を教えることにしました。紘くんも最初は乗り気じゃなかったものの、料理をしていくうちに笑顔が零れるようになりました。

紘くんは、頭が良いだけじゃなくて手先も器用だったから、私が作れなかったモンブランケーキも、上手に美味しく作ったのが少し悔しくて、私も負けじと頑張りました。でも何が違うのか、紘くんの作るモンブランケーキには及びませんでした。

紘くんの両親は本当に厳しかったみたいで、テストの点数が前より三点下がっただけでも、酷く怒られたみたいでした。

紘くんは本当に頑張っていたと思います。両親の期待に応えるために。自分の欲しい物は両親を喜ばせることでしか、手に入らないとも言っていました。

勉強もスポーツも、紘くんの成績表はいつもオールAだったと思います。習いごとは何もしていませんでした。そんな暇もなく、紘くんは勉強漬けの毎日で、気が付けば私も一緒に紘くんと勉強していました。

もちろん勉強もそうだけど、色んなことに関して、私が紘くんに勝ったことなんてありませんでした。一つ言えるとしたら、それは身長の高さでした。

話は戻りますが、私は海で溺れて死にかけたことがありました。それが丁度、紘くんと一緒に海へ行つたあの時です。

私と匠、それと真梨ちゃんは泳ぐことが出来なかったので浮輪がないと海で泳ぐことはできませんでした。紘くんはというと、浮輪もなくスイスイと一人優雅に泳いでいました。

浮輪がないと泳ぐことが出来ないというのに、弟の匠は不注意で浮輪に穴を開けてしまい、使い物にならなくなつてしまいました。その時、少し遠くにいたパパかママに新しい浮輪を買ってもらえばよかったんです。でもそうしなかったのは、ピーピー泣きそうになる弟の顔を見て、ここで私の浮輪を貸さなかったら、泣きだした弟を見たパパが私を怒ると思つたんです。もっとお姉ちゃんらしくしなさい、と。

私の浮輪を受け取つた匠は、また笑顔を取り戻して真梨ちゃんと浅瀬の方へと泳ぎに行きました。

私かというと、一人砂場で遊んでるのも嫌だったし、弟と真梨ちゃんのの中に入って一緒に遊ぶのも嫌でした。浅瀬の方で泳いで、奥まで行かなきゃ大丈夫。そう思つた私は、浮輪も無く一人で海へ向かいました。

突然、少し大きな波が来たかと思うと、気が付けば私は海の中にいました。小さな私は、いとも簡単に波に飲み込まれてしまつたん

です。途端に、浮輪を匠に貸したことを後悔しました。でもそんなことより、苦しくて、鼻に海水が入って辛かったんです。海面に頭が出たと思ったら、足を引っ張られたようにまた海中の中へ。何度かその繰り返しで、助けを呼ぶ声すら出せませんでした。

それを助けてくれたのが、紘くんでした。

海が危ないことも知っていました。一人で海に入っちゃいけないことも知っていました。でも、知っているだけじゃダメなんです。それを行動に移して、正しい判断をしなくちゃいけなかったんです。泣きながら、ごめんなさいを心の中で繰り返し紘くんの腕に必死に縋りました。助かる、これで助かる。海からあがったら紘くに謝ろう、お礼を言おう。一緒に貝や魚を食べよう。そして車の中で眠りながら家に帰ろう。

でも、私が紘くんの腕にしがみ付いたせいで、紘くんはバランスを崩し、紘くんも海の中へ消えてしまったんです。私は急いで腕から離れて、今度は紘くんの手を強く握りました。この手を離すもんかと、波に巻き込まれても、鼻に水が入っても、精一杯手を握りしめました。紘くんもおなじように、私の手を握っていました。

もう、パニック状態でした。たくさんの海水を飲み、体力も力尽きそうな時、声がしたんです。

『大丈夫か！ 今助けるぞ！』

幻聴ではありませんでした。

私と紘くんは無事でした。日に焼けた真っ黒なちよつと渋めのお
じさんに抱きかかえられながら、海を出ることができました。

それが、ライフセーバーという海の救急隊だと知ったのは、随分後だったと思います。

私と紘くんは、そのまま別の救急車で同じ病院に搬送され、安静の為一日入院しました。病室で、お見舞いに来てくれたママは泣きながら「ごめんね」と謝ってました。謝る方はこっちの方だったのに、どうしてもその言葉が出ませんでした。ママの悲しむ姿を見て、胸がギュツと苦しくて、言葉が出てこなくなっちゃったんです。しばらくしてから、あの時ごめんねって言えて、少し自分自身が軽くなった気がしました。ママはその時笑ってました。一緒にお見舞いに来た匠も、自分が浮輪に穴を開けてしまったことを後悔しているようでした。匠は悪くないよと、優しく説得しました。あの事故からもう十一年経ちますが、いまだに匠はどこかあの事故を気にしているような気がします。パパは何も言わず、優しく頭を撫でてくれました。

私も紘くんも命に別状はなく、翌日には元気に退院しました。病院から家に帰る途中、車の中で紘くんは私に言っただけです。

『イルカを探してたら、連が溺れているのを見つけたんだ』

それからもう、勝手に体が動いてたそうです。

海から助けてくれたのはライフセーバーのあのおじさんだったけ

ど、海の中で助けてくれたのは紘くんでした。

私は、泣きながら紘くんにありがとうを言いました。

紘くんは、よっぱどのがない限りあまり笑わない子でした。でもそんな紘くんがクスツと笑ったんです。そして『あの時手を握ってくれてありがとう』って。本当に涙が止まりませんでした。

本当に紘くんは不思議な子です。

そんな不思議な紘くんにも、苦手な物がありました。

水族館、海、その次は遊園地へ行ってきました。今度はパパとママがチケットをわざわざ用意してくれました。もちろん、紘くんと真梨ちゃんの分も。

遊園地に行くのはその時が初めてでした。私も匠も、真梨ちゃんも、感情をあまり表に出さない紘くんですえも、はしゃいでいました。やっぱり子どもなんですね。身長は足りなかったのでジェットコースターには乗れませんでした。船が大きく揺れるバイキングっていうやつですかね、アレに乗りながら二人でキヤーキヤー騒ぎました。匠は恐怖のあまり声も出でなかつたようですが、真梨ちゃんには私のパパとママに挟まれて、おお泣きしていました。

私は高いところが苦手なので、観覧車に乗るのは少し気が引けました。

観覧車は四人乗りなので、私と紘くんが一足先に二人で、残った四人は仲良く次の観覧車に乗りました。

もし万が一自分が乗っている観覧車が落ちたらどうしよう、なんて考えてる私には、外の景色を楽しむ暇ありませんでした。窓に

べつたりとくつついて下を見下ろしたりしている紘くんの姿を見て、理解に苦しんだのを覚えてます。

紘くんもいたずらをする子でしたよ。私が観覧車の中で緊張して縮こまっている姿に気づいた紘くんは、観覧車が一番高いてっぺんまで辿り着いたら、わざと体を動かして観覧車を揺らすんです。少し強い風が吹いて観覧車が揺れるたびに、私は心臓が破裂しそうになるのに、紘くんはそんなことお構いなしでした。

生きた心地がしない乗り物ですよ、あれは。もう二度と乗ろうとは思いません。ゴンドラは大して揺れないから、平気とはいかないけどまあ……乗れることは乗れます。

あれですね、高所恐怖症の人は遊園地ではあまり楽しめないということですよね。

お昼は遊園地の中にある食堂で食べました。たしか、カレーライスとメロンソーダを頼みました。紘くんはカレーライスに牛乳という組み合わせでした。カレーライスに牛乳は良く合うと言いますが、私はちよっとって感じです。試したことは一度も無いですが。

昼食を食べ終わったら、私たち子ども四人とパパは、お化け屋敷に入るようになりました。匠が大の心霊好きで、テレビ番組で特集されれば欠かさず見ていました。匠も私も怖いのは好きでしたが、怖がりでした。ママは怖いのが苦手なので、一人外で待つことになったんです。

今ではもう幽霊がどうのこうのなんて騒ぐ年齢じゃないですけど、当時の私は本当に幽霊がいると信じていました。だから、お化け屋敷には本物がいるんだって、誰もそんなことは一言も言ってなかったのですが、幼い私はそう思ってたんです。

パパを囲むように私たちはお化け屋敷に入っていました。凄く暗いのに、懐中電灯はたったの二本。一本はパパ、もう一本は進んで匠が持ちました。私はというと、パパの裾を引っ張って怖々と歩きました。

そうやって少し進んでいくと、お化け屋敷なので当然お化けがいるわけです。うめき声が聞こえ、私は強く目をつぶり、パパの腕に絡みつきました。とても怖くなった私は、歩くこともできませんでした。そうしているうちに、どんどんうめき声も近くなって私は、

こんな所で死んでしまうのかと、幼い頭で考えました。

ただでさえみんなに囲まれて動きづらかったパパは、一步も動かない私に『あれは人間だよ。お化けの振りをしているだけから何もしてこないし、怖くないよ』って私を安心させるために優しく言うてくれました。

うめき声で、幽霊がすぐそこにいるのは知っていました。

恐る恐る目を開けると、三メートルほど距離の離れたところに、包帯でぐるぐるにまかれた幽霊が立っていました。テレビで見る様な、スケスケの恐ろしい顔をした髪の長い幽霊はそこにはいませんでした。

その時、ここには幽霊なんていない。そう知った私は、とても足が軽くなりました。だけど小さな恐怖心は消えなかったので、パパの裾を掴んでいました。おかげで、無事にお化け屋敷から出た頃には、パパの服の裾は私が掴んでいた所だけ、情けなくビローンと伸びきってしまっていました。

紘くんはというと、お化け屋敷の中にいる間はずっと黙っていました。お化けの人に驚かされても、悲鳴一つすらあげたのを聞かなかったので、また大人ぶった顔をして平気で私の斜め後ろを歩いているんだと思っていました。

お化け屋敷から出てすぐに、ママと合流してから紘くんの異変に気が付きました。

首を地面に向けて、半分放心状態でした。話しかけても、うんしか返事しない紘くんのことを私は不覚にも大爆笑してしまいました。

こんな一面もある紘くんを見て、嬉しくて面白かったんです。

そのことをきっかけに、紘くんが家に遊びに来て、匠もいるときは三人でよく録画した心靈番組をみたものです。

私はテレビ画面より、紘くんの顔を見てる時間の方が長かったと思います。そのくらいよくリアクションを取って、私を笑い転げさせました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8370z/>

紘くんが殺した人

2011年12月27日01時46分発行